

定年退職を迎えたKさん夫婦の話です。K氏の奥さんには、以前からの願いがありました。退職を前にしたある日、妻から「退職金を頂いたら、一度でいいから現金を一晩抱いて寝てみたいの」と言うのです。「面倒だけれど、あなたの望みならしょうがないな」と言うしかありませんでした。

退職金が口座に振り込まれたので、K氏は早速、妻の願いを叶えてやったのです。大金を前に妻は大喜びし、「あなた、本当にご苦労さまでした」と、夫に対して労いのことばをかけ、K氏も「おまえには苦労かけたので、これからは旅行も行くし、好きなものも買ってあげるよ」と、妻の労に感謝いっぱいの定年の夜を過したのです。

ところが、翌朝、K氏が目を覚ますと、異変が起きていたのです。妻の姿が見えず、さらに退職金も跡形もなく消えていたのです。テーブルの上にあった手紙に目をやり、事の事実を知らされたのです。

それには、離縁の内容が記されています。今まで夫であるK氏に対し、我慢に我慢を重ねてきたということだったのです。

熟年夫婦の場合、妻側が圧倒的に離婚を考えているのに対して、夫側の大半が「まさか、うちの家内は…」と、思い込んでいるケースが多いといえます。妻が離婚への行動を起こすには、夫にも原因があります。

二年前、エアコン大手のダイキン工業が、首都圏と近畿圏の五十四〜六十二歳と二十六〜三十三歳の既婚男女、計四〇〇人にインターネットを通じて調査を行いました。結婚して二十年以上の男女に、二人で過ご



夫婦の苦難を越えて 人生の喜びを得る

え・牧えみこ

縁あって夫婦となった二人です。苦難を経て、感謝の思いを高められることこそ、事業繁栄や事業後継者の健全なる育成につながっていくと心しいものです。

九月一日より、倫理研究所は新年度をスタートさせました。昭和二十年九月二日に、創始者・丸山敏雄は、『夫婦道』の論文を起稿したのです。その中に、「結婚には多くの苦難を伴う。これを乗り越えて、踏み伏せ進むところに、夫婦道の深い喜びがあり意義がある」とあります。結婚生活の中で、互いに自分と相手の長所・短所を知る中で、相手を責めたり、憎しみあう心が出てきます。そつなると結婚は破滅につながります。しかし実は、そこが肝心なのです。自分のわがままを知り、いたらなさを見つけていくことが大切なのです。

下がると答えた妻の理由として、「自分の自由時間が減る」「嫌な面が目につく」「ストレスがたまる」などが上位を占めたのです。一方、結婚三年未満の男女に同じ質問をすると、男女共に約九割が「上がる」ということです。

昔から、夫婦は一心同体とか二人三脚などと言われ、また「偕老同穴(かいろどうけつ)」とも表されました。老いるまで仲良く連れ添い、死んで同じ穴(墓)に入るという意味ですが、このような夫婦の神話が現代では崩れ始めています。